

山内徳三郎「福岡佐賀長崎三県下炭坑巡回報告書」

(1884年4月)⁽¹⁾

青山英幸**

遠藤一夫***

解説

本史料は、北海道立文書館所蔵農商務省北海道事業管理局及び北海道庁炭礦鉄道事務所の『復命書』(簿書番号No.10515)に編綴されている3点の北九州炭礦の調査復命書のうちのひとつである。この史料の内容を紹介するにあたり、最初にこの史料が作成された背景についてみておこう。

周知のように、北海道においては、幕末以来、開港場箱館に寄港する外国船への石炭補給のために炭礦開発が茅沼でなされ、1879年(明治12)末に幌内でも着手された。幌内での開発は、1879年12月に大坑道掘鑿を着手し、1882年(明治15)に同坑道東西一番沿層坑で採炭をはじめ、また滝ノ沢・本沢にても同年に沿層坑が開かれた。そこに至る迄の間に導入された欧米技術は、お雇外国人の指導もあったが、むしろ日本人技術者によって担われたものであった。お雇外国人の影響をみると、1879年に開拓使雇米人技師ゴージョー

(翌年解雇)によって大坑道開削プランがたてられた点、また上記滝ノ沢・本沢開坑の契機が工部省雇英人ポッター(三池炭礦改良を担当)の意見にあった点などがみられるが、実際の炭礦開発は開拓使の技術官僚が担っていた。⁽²⁾この間、開拓使技術官僚が他の炭礦へ視察した痕跡はいまのところ見あたらない。

このような経緯のなかで、幌内の技術官僚が積極的に他の炭礦を視察し始めるのは、1883年以降である。上記『復命書』には、83年1月に三池・高島炭礦を視察した工部省三等属徳見淳三郎の復命書、翌84年3月に北九州諸炭礦を視察した本史料、そして85年5月農商務省権少技長河野鯨雄の三池・高島炭礦視察復命書が編綴されており、本史料はこれらのなかで視察炭礦が最も多く、同時に詳細であり、また後に紹介するように調査項目が多岐にわたっている復命書である。

報告者山内徳三郎は、1881年(明治14)以降幌内炭礦開発の責任者であり、83年時点では農商務省北海道事業管理局炭礦鉄道事務所

* 1992年7月18日受理

** 北海道立文書館

*** 北海道大学名誉教授・北海道情報大学教授

(1) なお、開拓使技術官僚が独自で、欧米の炭礦開発技術を導入したとは思われない。直接的には、ゴージョーが茅沼炭礦改良事業で指導した技術のほか、間接的には開拓使お雇米人ライマンの地質調査と開拓使技術官僚養成や、榎本武揚・大島圭介などの旧幕臣の開拓使官僚の調査などによって蓄積されたと推定される。

(2) 幌内炭礦と鉄道は、開拓使廃止後、1882年2月に工部省に所轄され、翌83年1月に農商務省北海道事業管理局の所轄に変更されている。

幌内出張所長である。それまでの官吏履歴を判明する範囲で紹介すると、1844年(弘化元)3月16日京都で生まれ、1872年(明治5)3月に開拓使御用掛(翻訳方)に任命されたが、同年11月に免ぜられ、翌73年3月に再び開拓使御用掛に任命され、翌年まで開拓使雇米人ライマンの翻訳方として北海道の地質調査に従事し、75年5月御用掛を免ぜられた。同年7月に内務省勸業寮雇となり、同年9月に大島圭介の信越地方出張に随行し、翌76年3月勸業寮八等出仕・地質測量補助手取締に任命され、同年4月ライマンに随行して北越地方の石油地質測量調査に従事した。77年1月に廃官になり勸農寮雇となったが、同年2月に工部省工部一等技手となり、工作局勤務を命ぜられ、越後地方の石油調査に従事した。80年9月依頼免職となり、同月再度開拓使の御用掛になり、同年10月煤田開採事務係、翌81年12月に煤田開採事務係幌内出張所長心得、82年3月に幌内出張所主任、83年1月に煤田并鉄道管理局幌内出張所長になり、同年3月に上記職に任命されていた⁹⁾。

以上のように、山内は開拓使雇米人ライマンのもとで地質調査技術を修得し、80年10月以降幌内炭礦開発に従事してきた技術官僚であり、84年3月6日に「実地景況視察ノ為福岡佐賀長崎三県下各炭山へ」出張を命ぜられたのである。

山内は、3月13日下関を出発して同月29日長崎を離れるまでの16日間に、福岡県下の遠賀郡香月村、鞍手郡直方村、穂波郡目尾村、佐賀県下の東松浦郡・杵島及び多久郡の炭礦、そして官営の三池炭礦と三菱会社の高島炭礦を巡回し、あわせて長崎県の中の島炭礦の聞き取り調査を行った。巡回目的は、主として幌内炭礦開発のための参考材料収集にあったようであり、当時近代技術導入の最先端にあった三池・高島炭礦を中心にみており、

それ以外の炭礦は巡回の行程上、中小の炭礦は聞き取り調査程度で済ませ、実地視察はほとんど省略しているが、その中で近代的技術が導入されつつある炭礦は視察している。

各炭礦での調査事項は統一されたものではないが、ほぼ次のような関心でなされている。

- ①各炭礦の地理的・地質的条件、炭層の状態、石炭の品質
- ②採炭・運炭等の諸施設一堅坑状態、坑道・切羽状態、坑道内運炭方法、採炭方法、坑道外運炭方法、排水方法、機械等の動力源〈蒸気機関・馬力・人力〉
- ③採炭・運炭等の人的配置、その雇用形態・賃金等
- ④生産量、製品の質、市場への輸送方法、市場での価格と販路等

視察した主要な炭礦の状態は、別表に見るように、三池・高島では坑道内外に運炭のための器械が導入されており、福岡県下中小炭礦の一部でも同様な器械が採用されているが、佐賀県下ではその動きがほとんどみられず、器械導入炭礦は84年当時休山していた。

視察の中心地、三池炭礦七浦坑報告の一部を紹介すると、第1堅坑は40馬力の捲揚機により2炭車が昇降し、建設中の第2堅坑には扇風器を設営し坑内空気の出口とする予定であるとし、坑外に設置の蒸気機関は11馬力の「コルニシ汽缶」2器と30馬力の「ランカント汽缶」1器である。坑内採炭は「ポストエンドストール法」により行われ、11間方の炭柱を残し、幅15尺の坑道には留木がなく、50カ所の切羽で採炭されている。採炭は先山が鶴はしで行い、後山が石炭を円形竹籠に積み炭車が運行する所まで天秤で運ぶ。炭車は自転車で坑道を上下し(曳揚機設置予定)、上記堅坑をへて坑外に搬出され、斜道上自転車で炭車は下り、その後馬で横須浜まで運送され

(3) 山内の履歴は、北海道総務部人事課所蔵記録による。

る。坑内外車道には鉄製の軌道が敷設されている。炭車はその容積が19立方尺で、総数400台。使用の馬は55頭。坑夫は、採炭部に三池監獄と長崎県・福岡県監獄の囚徒が配置され、先山に2名配置される。後山人数は切羽から車道までの距離によって決められており、20間毎に増員し100間までの距離を5段階とし、81～100間の場合に4名（原文のまま）であるとしている。鶴はしは坑夫自弁で、1日の採炭量は約500トンであった。彼らの賃金は炭車1台で行われ、先述の後山配置数5段階と対応して炭車価格も5段階であり、塊炭では4.41銭から6.09銭、粉炭では2.1銭から3.29銭で、先山と後山の賃金比率は2対1である。このほかに坑道掘進などに請負人を導入することもある。坑内車道の炭車運搬は炭礦雇用の掉取夫（時給）が行い、炭車の点検は坑口でなされ、坑外車道運搬は囚徒が行い、馬車運搬は請負人が行っていた。

報告者山内は、この七浦坑に入って、次の感想を記している。「坑道四通八達、恰モ黒屏裡ニ歩スガ如ク、上下左右皆是炭壁ニシテ一ノ留木ヲ見ス。且又頭ヲ縮メ胸ヲ併セテ歩スルニ及ハス。直ニ快乎ニ歎ク免レス。幌内炭山ノ如キ狹隘ナル坑内ニ在リシモノ、忽チ此坑ニ入レハ恰モ矮屋ヲ出テ太閤ニ昇リシノ感ナキ能ハザラン」。しかし、同時に次の2点も指摘している。第1には炭質が良好でないこと、第2には輸出の際の良港がないことである。また、総勢約1,100名の囚徒の使役については、幌内炭礦と比べて、参考とすべき点は賃金と衣食費の廉価な事以外はないと述べている。これは、この地方の物価が安価な事によるものであるとしている（この点は他の北九州炭礦でも同様であることを記述している）。むしろ、83年に大浦坑で、84年に七浦坑で囚徒による暴動があり、経営に苦心している姿に失望している。

三菱会社経営の高島・中の島炭礦については、炭層のあり方などによって坑道経営が三

池よりコスト高であること（例えば排水問題以外にガス問題があること、坑木を配置していること）、納屋制度によって採炭・運炭が行われていること、三池と同様に運炭部分に機械化がなされていること、などが報告されている。だが、高島では切羽をあらたに展開する状態ではなく、残された炭柱から採炭しており、この炭礦の寿命が短いことを指摘している。

また、筑前及び唐津・多久地方の中小炭礦の営業状態では、前者について、その石炭は唐津や多久地方より劣っているが、すでに紹介したように2、3の炭礦で蒸気機関を設営し、機械化を計り経営が安定しつつあることを報告している。

唐津・多久地方については、海軍省予備炭田下での下稼人が経営する炭礦などを報告している。これらの炭礦が北九州炭の中心的位置にあったのであるが、機械化が進行しておらず、より良質な炭田があると推定できるにもかかわらず、地質調査を実施しないで、大半の炭礦が薄い炭層をいわば狸掘り的に採炭している実態を見聞し、「此地方ノ形状ニ就テ痛惜ニ耐ザルモノハ、目前ノ利ニ汲々トシテ遂ニ永遠ノ富源ヲ失セシ如キモノアル」と述べている。それとは対象的に、筑前の目尾村や豊前の赤池地方の石炭が唐津炭より良質で、高島炭に次ぐものであるとし、「必ラス後來盛大ニ至ルノ期アルベシ」と記述している。

また、北九州諸炭礦の生産量が、関西・上海等中国沿岸主要開港都市の需要を上回るものであることも報告している。

以上のように、この報告書は、松方デフレ政策下での北九州地方主要炭礦における欧米石炭開発技術導入と経営実態を報告したものである。と同時に、報告者山内は、幌内で出炭されつつある石炭が、北九州炭礦の生産状況の中で、どのように進出していけるかを視察した報告書でもあり、日本石炭産業の成立

表 1884年調査北九州主要炭礦概要

	採炭層	豎坑等	採炭方法	坑道状態	切羽状態	蒸気機関	坑外運炭
福岡県 香月村 炭礦	厚2尺 8寸	豎坑 坑幅7尺長11尺 深125尺 捲揚器械	ピラーオーク法	坑道 坑木無 幅7尺高4尺 長4200尺 軌道有 炭車620斤入 (長3.8幅2.9 深2.9呎)	切羽 幅3尺	4台(8, 10, 15, 25馬力) 捲揚器械 ポンプ	川船積込 場迄27町 鐵路複線 (人力)
福岡県 目尾村 炭礦	第1番層 厚4尺 第2番層 厚5尺	豎坑 坑幅9尺長13尺 深175尺 捲揚器械	ピラーオーク法	第2番層坑道 坑木無 幅6尺高6尺余 炭柱方5間 軌道無 炭車無	第2番層 切羽 幅6尺 炭柱 方3間	3台(馬 力不明) 捲揚器械 ポンプ6	川船積込 場迄3町 車道炭車 運搬
佐賀県 岸山村 炭礦	第1番層 厚3尺 第3番層 厚5尺	豎坑 深120尺 捲揚器械 斜坑 780余尺		坑道 幅6尺高4尺	塊粉炭区別	1台カ? (8馬力) 捲揚器械 ポンプ2	川船積込 場迄10町 車道木輪 車運搬
福岡県 三池 七浦 炭礦	厚8尺	第1豎坑 坑直径14呎 深225尺 捲揚器械 (40馬力・ 2炭車) 第2豎坑 坑直径14呎 深200尺 扇風機設置予定	ポストエンド ストール法	坑道 坑木無 幅15尺 炭柱方11間 軌道 炭車700斤入 (長3.3幅2.5 深2.5呎) 自転車 曳揚器械設置 予定	切羽50カ所 鶴嘴 塊粉炭区別 2個の竹籠 にて運搬	3台(11, 11, 30馬 力) 捲揚器械 (40馬力) ポンプ 扇風機予 定	斜道一自 転車運搬 鐵路 横須浜迄 一馬運搬 複線
長崎県 高島 炭礦	第2番層 厚5尺 第4番層 厚18尺	第2坑斜坑 長2100尺 第1豎坑 坑幅10尺長12尺 深138尺 捲揚器械 (2炭車)	ピラーオーク法	坑道 坑木有 軌道 炭車600斤入 曳揚器械 自転車 馬	切羽若干 炭柱採炭 鶴嘴 塊粉炭区別 2個の畚に て運搬	台数不明 捲揚器械 ポンプ24 扇風機	斜道一自 転車運搬

山内徳三郎「福岡佐賀長崎三県下炭坑巡回報告書」(1) (青山・遠藤)

その他諸施設	納屋頭・坑夫・職員等	生産量	石炭価格等	主な生産費
	大棟梁1名 職員数不明 棟梁10名 坑夫約120名 (近傍村民) 前山1名後山1名 番方2番(現在日中のみ)	日産15～ 16万斤	原価1万斤に付9.20 円(輸送費込み) 若松港価格—1万斤 に付12～13円	1万斤に付 坑内費(石炭買上・坑道掘進 修繕・棟梁給料等) 3.80円 採炭1～2.3円/坑内運炭 9.7銭/坑外運炭56.4銭 坑外費(器械費・役員給料) 3.20円 運送費(若松港迄) 2.20円
	棟梁1名 坑夫人数不明 前山後山各1名 就業時6～18時 書記1名 機械ポンプ等数名	日産12万斤	原価1万斤に付6円 (輸送費込み) 若松港価格—1万斤 に付13円	1万斤に付 採炭上等2円、中等1円 本道掘進6尺付1円 坑外運炭費55銭 棟梁8銭 運送費(若松港迄) 2.60円
	下稼人・職員数不明 坑夫430～50名 (運搬夫込?) (村民) 番方2番	日産15万斤 (最盛期)		1万斤に付 下稼人へ(土場渡) 塊炭13円、粉炭3円 本道掘進6尺に付2.50円 下稼人から坑主へ 器械費1月350円 運送費(満島迄)1.3～1.4円
	坑夫(囚人)約1100名 前山2名後山1～4名 番方2番 職員・職工等約1100名 坑外馬車運搬—請負	日産約500トン		1万斤に付 採炭—塊炭63～87銭 粉炭30～47銭 坑内運炭—1時間当り0.7 ～1.72銭 囚人1日当り衣食費8.5～6 銭 良民坑夫1時間1.58銭以下
アウヒー安全燈 クラニー安全燈 各種工場	納屋頭20名 坑夫約2000名(大半渡り 坑夫)番方2番 職員・職工等約2000名 外国人4名 鉞山師・機械師各1名 同上助手各1名	日産850～ 900トン	原価1トンに付3.392 円(塊炭粉炭平均)	1万斤に付 採炭—塊炭2.464～3.584円 粉炭1.632～2.176円

過程解明に有益な材料を提供するものと言えるであろう。また、北九州各炭礦で用いられていた切羽や先山・後山などの用語が、北海道では使用されていないことを示唆する箇所もあり、その点でも興味をそそる史料である。

本文は農商務省野紙に書かれており、これは炭礦事務所の控ないし写本である。本史料

解説にあたり、原則として、常用漢字を用い、異字・俗字等は常用漢字以外のものは正字に改めた。また、句読点は解説者が適宜付与し、解説者が必要と思われた点は〔 〕内に注記した。なお、本文中「掘進」などは「掘」の誤用であるので、訂正した。

前月六日福岡佐賀長崎三県下炭坑實際ノ景況視察ノ命ヲ蒙リ、同月八日東京出發仕候。然レトモ右三県下ノ炭坑ハ其数實ニ夥敷。若シ一々之ヲ視察セントスレハ、時日ヲ要スル久シカラザルヲ得ス。然ルニ小官ノ本務上永ク他方ニ留ルコトヲ得ザルト、筑前并ニ唐津多久等ノ地方ニ於ケル無数ノ小炭坑及ヒ平戸今福等ノ如キ地方ニ至テハ緊切ノ關係尠ナルベシト思惟セラレ候ニ由リ、筑前及ヒ唐津多久地方ハ途次ノ便宜ニ任セ其一ニヲ訪問仕、平戸今福等ハ出炭ノ高稍多キモ元ヨリ劣質不良ノ石炭ナル由多ク世人ノ説ク所ナルヲ以テ全ク之ヲ不問ニ付シ、単ニ筑後三池肥前高島ノ両炭山ハ最モ規模壯大完備ノ炭山ニテ、特ニ九州ニ於ケルノミナラス本邦中一等ノ地位ヲ占メ、殊ニ三池炭山ノ如キハ我幌内ノ参考ニ供スヘキ材料ニ富ムヘキノ地ト被存候間、可成詳細ノ調査ヲ加エ、同月廿八日ニ於テ巡回ヲ終リ、本月七日帰京仕候。依テ巡回取調候各地炭山ノ景況ハ之ヲ別冊報告書ト為シ、謹而供電覽候。但シ其間伝聞ニ屬スルモノ亦尠カラス。故ニ或ハ正鵠ヲ失セルモノ必ラスシモコレナキヲ保スル能ハス。請フ、閣下幸ニ之ヲ明察セラシメテ。此段謹而復命仕候也。

明治十七年四月廿日

炭礦鉄道事務所幌内出張所長

権少技長山内徳三郎

北海道事業管理局長

農商務大書記官安田定則殿

〔別冊〕

福岡佐賀長崎三県下炭坑巡回報告書

福岡佐賀長崎三県下ノ炭坑其数甚タ多シ。今回實際ノ形況ヲ視察セルモノ専ラ筑後国三池肥前国高嶋ノ二坑ニシテ、其余筑前国香月直方目尾村ノ三坑肥前国唐津地方同多久地方等ノ如キハ巡回ノ途次順路ノ便宜ニ任セ大体ヲ見聞セシニ過キス。然レトモ、今其巡回ノ順次ニ由リ筑前炭坑ヨリ創メ、左ニ之ヲ述ベシ。

筑前炭坑

福岡県下筑前一國中炭坑亦多シ。左ニ掲ルモノハ其間唯一二ノ炭坑ニ止マレトモ、其筑前ニ屬スルヲ以テ此称ヲ下セシノミ。

○香月村炭坑

香月村ハ同国遠賀郡ニアリ。豊前小倉ヨリ長崎ニ至ルノ街道石阪村ヨリ小流ニ沿ヒ右折シ凡ソ十余町ノ川下ニアリ。其炭坑ハ帆足某ノ所有ニシテ、之ヲ斯波第一炭坑ト称セリ（帆足氏始メ斯波ト称セシ趣）。借区ハ「拾万坪。炭坑ノ地位ハ村中少シク高キ所ニ就テ、爰ニ堅坑ヲ下セリ。長サ拾一尺幅七尺深サ百貳拾五尺ニシテ、第二層ニ達セルモノナリ。炭層二アリ。第一層ヲ「エザリ」ト呼ビ、厚サ七寸。其下ニ五寸ノ中石ヲ隔テ第二層アリ。「大ネト」ト称ス。厚サ貳尺八寸。則チ採炭ヲナスモノトス。其傾斜凡五度、西北ノ方向ニテ盤状層ノ側面タリ。坑道ノ長延ハ前後各式千百尺幅七尺高サ四尺許。「ピラーオーク」法ヲ用キ、炭柱ヲ留メ、切羽（採炭ノ場所ヲ云フ）ヲ設ク。幅員三尺ニシテ、目下最モ進ミタルモノ四百貳拾尺許。使役坑夫ノ

数ハ「百貳拾余名。皆近傍ノ土民ナリ。其坑夫番方ハ二方ニ分チタルモ、現今ハ昼間ノ一方ニノミ止メタル由。一ヶ月間十五日ト尽日トノ二日ヲ休暇ト定メ、若シ前山後山（此等坑夫ノ方言ハ三池炭坑ノ部ニ注釈セリ）兩名ニテ一切羽ヨリト方ニ六千斤ヲ採出スレハ、奨励ノ為メ買上定価ノ外ニ手巾乃至白布若干尺ヲ賞与スルノ法ヲ設ケ、目下日々ノ出炭高ハ「十五六万斤ナリト云フ。

坑外ニ蒸気汽缶四アリ。八馬力拾馬力拾五馬力廿五馬力ナリト。捲揚器械ヲ装置シ、粗製ノ鉄籠ヲ付シテ炭車并ニ坑夫等昇降ノ用ニ供シ、兼テ唧筒ヲ用キ排水ニ備フル等、三池高島両炭坑ト其方法ヲ均シクス。唯大小完不完ノ差アルノミ。捲揚綱ハ広島産ノ麻ヲ以テ製セルモノヲ用ユ。直径凡二吋、月ニ兩回新旧交換スト云フ。

坑夫等ノ取締ニハ、棟梁ト称スルモノ坑外并ニ坑内ニ各五名アリ。外ニ大棟梁一名ヲ置ク。此ハ其実坑主ノ兼ル所ニシテ、十名ノ棟梁ナルモノ専ラ坑事ヲ統ヘ坑夫等ヲ指揮ス。又其理財法タル、始ヨリ石炭壹万斤ヲ金七円ト定メ、之ヲ坑内費三円八拾錢坑外費三円貳拾錢ニ分チ、煤炭ノ買上坑道ノ掘進修繕棟梁ノ給料等ハ此坑内費ヲ以テ弁セシメ、器械費并ニ役員ノ給料等ハ又此坑外費ヲ以テ支弁スルモノトセリ。但シ、坑夫ヨリノ買上直段ハ、本道即チ軌鉄ヲ布設セル車道ト切羽トノ距離ニヨリ壹荷百斤入ニテ壹錢ヨリ貳錢三厘（本道迄ノ運搬賃ヲ込ム）ナリト。其坑内所用ノ器具需用品等ハ一切坑夫ノ自弁トス。又本道車車（六百廿斤入ト云フ、長サ三拾八吋深サ二十吋巾二拾九吋ナリ）ノ運賃ハ平均六厘許ナルヨシ。○坑口ヨリ川船積込場マテハ距離廿七町アリテ、二条ノ鉄路ヲ布設セリ。更ニ勾配ヲ付セス。往返共ニ人力ヲ用ユ。壹車ノ運賃三錢五厘。壹人一日平均五往返。即チ五車ヲ運搬スルヲ常トスト云ヘリ。

船積場ヨリ同郡木城灣若松港（小倉ノ西北凡一里、（半、現今博多ヘノ濱街道ニシテ、曾テ団炭製造所ヲ設ケタル有名ノ港脚ナリト聞ケリ））迄ノ運搬賃ハ、

壹万斤ニ付貳円二十錢ナリト云フ。而シテ若松港現時ノ炭価ハ壹万斤概ネ拾二三元ナリト。今若シ七円ト貳円二十錢ヲ合スレハ「九円二十錢、之ヲ拾二円ヨリ控除スレハ壹万斤ニ付貳円八拾錢ノ殘金アルベシ。之ヲ以テ、軌道炭車ノ修繕事務所ノ諸費并ニ器械等一切ノ元資償却ニ充テベキモノトス。然ルニ、事務所員ノ云フ所ニヨレハ、近来炭価ノ下落ニヨリ頗ル困難ヲ感セリト。惟フニ、炭価下落スルモ亦坑夫等ノ賃錢モ白米尅升金五錢ナルニ起因シ、大ニ減少セシ実アレハ、差引不利ナラザルベシ。唯其採出炭ノ不捌ナルハ、坑業ヲ昼間ノミニ止メタルヲ以テモ証スベキノミ。

此坑ヲ距ル貳里許、黒未ト唱ル地ニ一炭坑アリ。支那人其資金ヲ弁シ、稍盛大ニ赴ケリト云フ。又近傍ニ無数ノ炭坑アリト雖トモ、大概村民二三名協力シテ開ク所ノ小坑ナレハ、見ルニ足ルモノニアラスト云ヘリ。

○直方村炭坑

直方村（俗称「ノーガタ」ハナラカタノ訛伝カ）ハ長崎街道ニシテ、鞍手郡ニアリ。香月村ヨリ西南凡貳里許。村中字「切抜ト唱ル地ニ斯波第二炭坑ヲ設ク。坑主ハ香月村ニ於ケルモノト同一ナリ。コノ地ノ借区ハ八万坪ニシテ、目下堅坑着手中ニ係ル。其坑ノ大サハ幅八尺長サ拾五尺深サ七拾五尺ニ及ベリ。尚六十五尺ヲ進ミ、合計百四拾尺ニシテ竣功ノ目途ナリト。又ソノ目的トセル炭層ハ、第一層五尺第二層三尺（第一二層ノ間ハ凡四十尺）ノ由。此ハ近傍ノ小炭坑等ニ由リ推測セシモノナリト云フ。○坑外蒸気器械壹台ヲ設置シ、又凡二町許街道ヲ隔タル林中ニ一斜坑ヲ穿テリ。鉄管ト竹管トヲ以テ蒸気ヲ引キ、唧筒ノ用ニ供ス。此ハ後來、風坑ト坑夫出入ノ門トニ供スベキノ見込ナリト云ヘリ。

此地ハ直ニ飯塚川ニ臨ミ、運搬ノ便頗ル良ナリ。其川路ハ香月村ヨリモ遠キヲ加フト雖モ、廿七町ノ車道ヲ要セス。且果而其實ノ如ク五尺ト三尺ノ炭層ヲ得ルモノトセハ、他日

坑業ノ便益アル香月炭坑ニ勝ルベキハ又論ヲ
 俟タス。然レトモ、坑事尚落成セサレハ、此
 他ニ報スベキノ要件ナシ。

○^{シヤカノオ}目尾村炭坑

目尾村 僞稱「シヤカノオ」ハ「サクモ亦タ長崎街
 ワンノオ」ノ訛伝ナラン
 道ノ一村落ニシテ、穂波郡ニ属シ、直方村ノ
 南三里ニアリ。村中飯塚川ニ接シタル字山ノ
 谷ト唱ル地ニ炭坑ヲ開ケリ。長崎人杉山某ヲ
 坑主トス。其堅坑ハ十三年ニ着手セシト云。
 巾九尺長サ拾三尺深サ百七拾五尺ニシテ、第
 二番五尺層ニ達ス。坑口ヨリ百三十尺ノ所ニ
 第一番四尺層アリテ、従前専ラ採炭セシモノ
 ナレトモ、炭質良ナラザルニヨリ近年第二番
 層ニ着手セリト。蓋シ当初開坑ノ主眼ハ此五
 尺層ニアリタレトモ、業ヲ起セル中路資金ニ
 欠乏ヲ生セシニヨリ、不得止四尺層ヲ開取セ
 シニ、時恰モ炭価ノ騰貴ニ際シ大ニ資金ヲ加
 エタルヲ以テ、遂ニ業ヲ進メテ五尺層ニ及ボ
 シ、始ノ目的ヲ達スルヲ得タリト云。其上部
 ヨリノ石層ヲ調査セルモノヲ見ルニ、炭層合
 計拾壹層アルコト左ノ如シ。

第一	七ヘダ三尺	中石セウド三尺
第二	タドン三尺	中石三尺
第三	カンカン五尺	中石二尺
第四	一番四尺層	中石六尺
第五	クサ石	中石八尺
第六	ドマガサ壹尺六寸	中石四尺
第七	三枚壹尺六寸	中石壹尺
第八	中メ三尺	中石三尺
第九	上亀壹尺六寸	中石二尺
第十	下亀壹尺六寸	中石四尺
第十壹	二番五尺層	

傾斜ハ平均拾八度許、北六十七度半西ノ方向
 ニシテ盤状層ノ側面ナリ。第二番層ハ縮緬五
 尺ト唱フ、組織ノ相類セルニヨルナラン。良
 煤ニシテ香月炭ニ優ル数等ナリ。

第一番層ヨリハ既ニ八百万斤余採出セル由。
 其本道ノ長延^{（一）}千弍百尺、下リノ最モ遠キハ
 「千弍百尺、上リノ最モ長キハ「百五十尺（上
 リハ旧坑ト河水トノ関係ニヨリ高ク進ムコト

能ハザル由）ニ及ベリト云フ。第二番五尺層
 ニ入リテ檢スルニ、坑内本道ハ幅六尺高サ六
 尺余、方五間（三十尺）ノ炭柱ヲ留メ、切羽
 ヲ進ム。切羽ハ方三間ノ炭柱ヲ留メ、幅六尺
 ニ掘進セルモノニシテ、「ピラーオーク」ニ
 由ル。着手後未タ久シカラザレハ区域広カラ
 ス。且車道ノ設ケナシ。○坑夫使役法ハ棟梁
 一名ヲ置キ、都而坑事ヲ委ネ、其採炭ハ坑内
 ニテ壹万斤上等弍円中等壹円ト定テ之ヲ買上
 ケ、本道掘進ミノミ別ニ掘込六尺ニ付金壹円
 ヲ給スルノ外、下水井ニ「^{（二）}トダ」掘取等一切
 坑夫ノ負担ト定メ、其棟梁ニハ出炭壹万斤
 ニ付金八錢宛ヲ給シ、以テ之ガ手当トナシ、
 坑夫ヲ統ベシムルノ方法ナリト云フ。目下日
 々ノ出炭高ハ「拾弍万斤ニシテ、朝六時ヨリ
 業ヲ執リ夕六時ニ終ラシム。○此炭層ニハ三
 池高島ニ於ケルガ如ク「トダ」ト唱ルモノア
 リ。本道ハ必ラス之ヲ掘除カシムルモ、切羽
 ノ如キハ避ケテ坑道ヲ迂曲セシムルヲ常ト
 ス。甚タ坑業ニ有害ノモノナリト云ヘリ。○
 上磐極テ堅良、又留木ヲ要セス。且坑内瓦斯
 等ノ恐レ更ニナキヲ以テ、坑夫ノ灯火皆石油
 ヲ使用セリ。実ニ便宜ノ良坑トス。○坑夫一
 日ノ稼高ハ前後山兩人ニテ平均三千斤ヲ得ベ
 シト云。

煤炭ノ坑外ニ達スルヤ、之ヲ炭車ニ積入レ、
 川端迄三町許ノ車道ヲ運送シ、一旦船積場ニ
 卸シ、再ヒ之ヲ船積セシム。此坑外費用ハ壹
 万斤ニ付船積迄金五拾五錢ヲ要スト云フ。
 坑上櫓ノ高三拾三尺、車ノ径五呎十吋。又捲
 揚器械「^{（三）}ドロム」ノ径五呎十吋長サ六呎六
 吋。鋼製捲揚網ヲ用キ粗製ノ鉄籠ヲ以テ昇降
 セシム。蒸汽氣缶三個ヲ備エ、坑内四尺層ノ
 所ニ弍個、五尺層ノ所ニ四座ノ唧筒ヲ据付ケ
 タリ。○坑主杉山某ハ元器械士ノ由ニテ、自
 ラ器械ヲ司リ、兼テ坑内ノ測量採炭ノ方法ヲ
 指揮シ、會計運輸販売ノ諸務ヲモ親掌シ、僅
 カニ書記名ト器械唧筒等ニ数名ノ人ヲ役ス
 ルノミナリ。甚タ簡易ノ炭坑ト云フベシ。同
 氏ノ言ニ、煤炭壹万斤ヲ若松港ニ運送スル

ニ、其賃銭貳円六十銭ナレハ、諸雑費（器械費ヲ除キ）ヲ合セ都而若松港ニ於ケル壹万斤ノ原費ハ金六円ニ超エス。故ニ目下炭価下落シテ壹万斤拾三円ナレトモ、差引金七円ヲ余スヲ以テ、器械諸費ヲ償ヒ、尚若干ノ益金アリ。唯近来不捌ナルヨリ巨多ノ益ヲ見ル能ハザルモ、更ニ困難ヲ感ゼザルナリト云ヘリ。現ニ同坑組織ノ簡易ナルト、同氏ノ鋭敏ナルトヲ以テ推測スレハ、其言強チ矯飾ニアラザルモノ、如シ。同氏其始メ凡三四千円ノ資本ニテ事ヲ起シ、一時大ニ困難セシモ、今日ハ全ク其資金丈ハ之ヲ取戻シタレハ、此坑所屬ノ諸器械ハ業ニ既ニ純益ト看ルベキモノナリト云フ。且其炭質ハ良好ニシテ、坑内ハ「トヂ」ト水トノ外ニハ冗費ヲ要スルモノナケレハ、数年ナラザルニ同氏ヲシテ巨財ヲ握ラシメンコト、深ク疑ヲ容ルベキナキニ似タリ。

○

筑前中前二坑ノ外各所ノ小坑モ多数ナレハ、日々ノ採出高又以テ巨額ニ至ルベシ。而シテ其運輸ハ概ネ飯塚川〔河〕ヲザルハナク、沿岸一路船積場ヲ設ケ、石炭ヲ貯フル所其数幾個ナルヲ知ラス。且此河流木屋瀬駅直方村ヨリ一里小倉ノ方ニヨレル駅ナリノ南ニ於テ分歧シ、豊前ニ入レリ。之ヲ赤池川ト唱ル由。則チ同国赤池地方ノ産炭モ亦之ヲ下リテ、共ニ若松港ニ輻湊ス。故ニ日々同港ニ会スル所ノ船数ハ概ネ三四百艘ニ下ラスト云ヘリ。今仮ニ此壹艘ノ容量ヲ五千斤、一日ノ船数ヲ三百五十艘ト算センニ、合計百七拾五万斤則チ「千噸余ナルベシ。但シ香月炭ハ其質良ナラス。其他河畔所々ノ船積場ニ在ル所ノモノモ、亦彼ト伯仲ノ間ニアレトモ、目尾村ノ縮縮五尺ハ唐津炭ニ優リタリ。曾テ若松港団炭製造所ノ器械師仏人エゴイ氏カ該炭ヲ分析セン由ノ表ヲ見ルニ、揮発分三六、炭五八、五 灰五、五ニシテ、枯煤ハ「百ニ付六四、ノ割合ナリト。且云ク。此炭ハ豊筑中最モ灰分ノ少キモノ、然モ油分ハ一ノ谷産炭地ノ名ナランヨリ少シ云々トアリ。其記載簡易ニ過タレトモ、其質ノ不

良ナラザルヲ知ルベク、又彼赤池炭ハ此近ニテノ最上炭ナリトノ評アレハ、此二品ハ唐津ノ上高島ノ下ニ立ツコトヲ得ベク、必ラス後來盛大ニ至ルノ期アルベシ。

唐津炭坑

世ニ唐津炭坑ト称スルモノハ、佐賀県下肥前国東松浦郡ノ各村ヨリ採出スル石炭ノ総称ニシテ、此名アル所以ノモノハ、各地ノ産炭皆松浦川ヲ下リテ唐津河口松浦川ノ海ニ注グ所ナリニ湊合シ、爰ヨリ本船ニ積入レ各地ニ輸出スルニ由レルナルベシ。而シテ唐津炭ト総称スルモノハ、概スルニ「壹枚モノ」二枚モノ」三枚モノ」三種ト岸山村炭トノ四種ナルモノ、如シ。然モ其壹枚モノハ多ク不良至薄ナルヲ以テ掘採スルモノ少ク、二枚三枚モノ、二種最モ多数ナリト云フ。

唐津ノ旧城跡ニ対スル東岸ノ地ミツマヲ満島ト呼フ。船舶ノ輻湊スル所ナリ。但シ此松浦河口ハ遠浅ニシテ大船ハ入ルコトヲ得ス。唯々沖合ナル島嶼ノ間ニ碇泊シ舢舨ニ由テ船積ヲナスノ外ナケレハ、風波アレハ荷積ノ便宜ヲ失シ、徒ニ滞泊セザルヲ得スト云フ。○旧城内川ニ臨メル所ニ唐津海軍石炭用所以下単ニ用所トノミ書スアリテ、同省用ノ石炭ハ皆爰ニ貯蔵セリ。蓋シ東松浦杵島両郡ノ産炭地方ハ概ネ用所ノ予備地ニシテ、其間從來借区ノ許可ヲ得タル私坑亦散在セリ。然レトモ開採日久ケレハ、坑内ニ入りテ敵ニ之ヲ測量セハ、恐ラク借区外ニ及ベルモノ、ミナラントノ評アリ。今用所ノ予備地ニ属スル村名坑数并ニ昨年ノ採炭高ヲ聴クニ、大略左表ノ如シ。

〔表は次頁に掲載〕

則チ総計五千五百六十九万三千六百八拾斤（三万三千四百噸余）ナリ。而シテ用所ハ更ニ坑業ニ直接ノ關係ナク、何人ニテモ予備地内ニ就テ坑ヲ開キ、採炭并ニ産炭買上ヲ願出ルモノアル時ハ、之ヲ下稼人トシテ許可シ、兼テ松浦河畔ニ設ケタル四ヶ所ノ土場（船積場ヲ云フ）ニ其採炭ヲ運出セシメ、役員検査シテ之ヲ最上等上等下等ノ三種ニ区分シ、最

郡名	村名	現業坑数	廃坑数	所産炭最上等斤数	同上 上等 同上	同上 下等 同上
東松浦	相知	三七	四三	一,五三四,七五〇	一,一一四,二九五	九,八八五,五八六
	本山	一五	一	二,八四九,八九〇	一,四三二,三〇六	五,七九五,〇四〇
	岩屋	六	四	二,一二一,七七〇	一,四一二,三三〇	五,三一〇,三六〇
	波口	三		四九〇,〇〇〇	四七一,八六〇	四,二〇九,〇〇〇
	平山上	五二		四,二二四,七七〇	一,九六八,五〇五	四,二二五,四八〇
	平山下	一一	五	二,九四八,〇四八	九六一,二九〇	三,一六〇,七八〇
	佐里	九	一三	五八,〇〇〇	九九,八九〇	一,四一九,七三〇
杵島	岸山		一七			
	久保崎		二〇			
合計二郡	十ヶ村	[ママ] 一三二	一〇三	一四,二二七,二二八	七,四六〇,四七六	三四,〇〇五,九七六

上等ト上等トハ用所トシテ船積セシメ、下等（勿ネ炭ト唱フ）ハ其下稼人ニ限キリ之ヲ授ケ、彼等ニ於テ他ヘ売払タル後、収入金高百分ノハ用所ニ納メシメ（坑業税ニ均シ）、土場并ニ掘採ノ際ニ生シタル粉炭ハ、下稼人ノ所得トナサシムルノ方法ナリト云フ。土場ニテ船積ノ容赦ハ弍割（百斤ニ付廿斤）ヲ見込マシメ、其盡用所ヘ廻送ス。右弍割ノ内五分（百斤ニ付五斤）ハ用所ノ所得トシ（貯蔵欠減ノ見込）、一割五分（百斤ニ付十五斤）ハ各所廻炭雇船揚卸ノ欠減ト見做セリ。若シ廻送先ニ於テ陸揚ケニ剩余アレハ、其船主ノ所得トスト云フ。炭価ハ一年兩回（六月十二月）ニ定メ、其間ノ高低ハ顧ミスト云フ。試ニ其最上等上等下等ト称スルモノヲ見ルニ、均シク同一層ノ炭ナレハ別ニ差異ナキモ、凡六七寸以上ノ塊炭ヲ最上等、其以下ヲ上等トシ、下等ト称スルモノハ二三寸以下磐付（上下磐石ノ付着セルモノ最上等ニモ往々之ヲ見ル）等ノ塊炭ニ外ナラズ。而シテ目今ノ炭価ハ、用所受取ニテ最上等老万斤弍拾三円五拾九錢九厘、上等同弍拾老円五十四錢七厘。又川下ケ賃ハ、土場ノ遠近ニ由リ老円四拾五錢ヨリ七拾五錢迄ノ差アリトス。然モ之ヲ満島港ノ炭価上等一万斤拾八円五拾錢以下拾円迄ノ格ニ比スレハ、最上等ハ凡五円余、上等ニテモ尚三円余ノ差アリトス。惟フニ此下稼人ナルモノハ最上ノ

常得意ヲ有シ、頗ル便宜ナルモノナリ。故ニ却テ坑事ニ十分ノ資金ヲ投シテ永遠ノ策ヲ講センヨリハ、寧口目前ノ利ニ馳ラザルヲ得ザルノ勸奨ヲ与ルガ如キ傾向アルヲ以テ、彼等唯表面簡易ノ部分ノミヲ縦横ニ穿掘シ去リ、産炭地ハ恰モ蜂巢状ヲナシ、遂ニ地下富源ノ大部分ハ又之ヲ採出スルノ道ナカラシムベシ。誠ニ一國ノ經濟上數惜ニ耐ザル所ナリ。用所ノ官吏ハ所長奏任名所員判任三名雇十四名ニシテ、其組織ハ營業費ナリト。然モ本省ヨリ一ケ年所用ノ炭量若干万斤ノ注文ヲ受ケ、之ニ由テ買入ヲナスト云ヘハ、他ノ營業場トハ大ニ異ナル所アルヘシ。其本年度ノ買入定額ハ老千八百万斤（老万〇八百噸許）ニテ、現在貯蓄炭二百五十万斤許、既ニ各地送遣済老千二百五十万斤余、向後買入ヲナスベキ残額ハ僅ニ三百万斤弱ナリト云フ。○用所ニ於ケルノ雜費ヲ聞クニ、船便ノ都合ニヨリ其買入炭ハ之ヲ一旦倉庫ニ陸上セザルヲ得ス。而シテ倉庫ノ位置ニヨリ賃額ニ差等アリ。之ヲ四別ス。其平均老万斤ノ陸上ケ庫入費金七拾老錢二五。又風帆船ヘ庫出并ニ解賃モ同シク四等アリテ、平均老万斤老円六十七錢五厘ナリト云ヘハ、唐津港船積ニテ最上炭老万斤ノ価格ハ金廿五円九拾八錢六厘余ナルヘク、之ヲ東京ニ回漕スレハ其運賃少クモ拾八円以上ナランカ。然ラハ品川港ニテノ価格

ハ金四拾三円九拾八錢六厘余(用所ノ經費ハ暫ク算外トナスモ)三至ルベシ。若シ之ヲ幌内炭ニ比センニ、同炭手宮ノ価格ハ尙噸金五円、東京ヘノ運賃尙噸金貳円(三菱汽船会社申込賃額)、之ニ棧橋積込費等トシテ五拾錢ヲ加算スルモ尙噸金七円五十錢、此六噸(即チ一万斤)ノ品川ニ於ケル価格ハ金四拾五円ナルベシ。而シテ幌内炭ト唐津炭トノ從來ノ試験比例ニヨリ極テ安全ノ算ヲ以テ一割ノ差トセンモ、彼ハ四拾八円三拾八錢四厘(尙万尙千斤ノ價格)ニシテ三円以上ノ差アリ。加ルニ艦内炭庫ノ容量上ニモ一割ノ差アリトセハ、貳百噸ヲ入ルベキ炭庫ハ二百二十拾噸ヲ貯ヘ得ルニ均シカルベケレハ、東京以北ニ於ケル海軍所用ノ炭ハ、之ヲ幌内ニ仰クノ得策タル經濟上ノ一理ニ於テモ亦明カナリト云フベキナリ。

用所ノ芻炭炭即チ下等炭并ニ近傍私有ノ炭坑ヨリ満島ニ輻湊スル所ノ炭量亦尠カラス。從來社ヲ組ミ其売捌ヲナセルモノ公平社、合併社、炭山組等アリ。近時又開産社ナルモノ起リ、内地各所及ヒ海外輸出ヲ謀リ、一倒一起相續テ業ヲ営メル由。凡此松浦川ヲ下ル所ノ炭量ハ、一ヶ月一千三百万斤ニ及フベシト云フ。此内ヨリ用所ノ分ヲ除クモ一ヶ月尙千万斤内外ノ出炭ナルベシ。其相場ノ如キハ前既ニ之ヲ述タルカ如シ。而シテ目今開産社ヨリ東京印刷局ト約定ヲナセル價格ハ、同局届ケ最上等尙万斤四拾五円四十錢ニテ、一ヶ月ノ需用高百廿万斤ナリト云ヘリ。然ルニ目下東京唐津炭ノ相場ハ尙万斤三拾四円許ナリト聞ケハ、此言容易ニ信シ難キガ如シト雖モ、満島ニ於テ上等炭既ニ十八円五十錢ナリ、之ニ東京迄ノ運賃ヲ拾八円トシ、舁并ニ爾余ノ諸費ヲ合算セハ、東京ニ於ケル上等炭ノ價格ハ少クモ三拾八九円ニ至ルベク、決シテ当今ノ相場ニテ売却シ得ベキニアラス。其之レアルモノハ、或ハ殊更ニ捨売ヲナスモノカ、不然ハ下等炭ナルベシ。

前表ニ掲シ相知村以下ノ炭坑ハ、所謂小坑ニ

シテ、尙枚貳枚及ヒ三枚モノヲ掘採スルモノ、ミ。其層ノ最モ厚キ尙二尺ニ過キス。薄キハ六七寸ナリ。故ニ坑内ハ匍匐セザレハ進ムコト能ハザルモノ多シ。其排水法ハ水坑ヲ穿テ之ヲ導クモノアリ。若シ地下ニ入ルコト稍深ク、此方法ヲ行ヒ得ザルモノハ、粗造ナル竹製唧筒ヲ設置シ、人力ニヨリ排水スルアリ。灯火ハ普通ノ灯蓋皿ニ灯心種油ヲ用ルヲ常トス。故ニ到底深ク進ム遠ク穿ツコト能ハス。大氣ノ流通ヲ失フカ排水ニ困シメハ此ヲ捨テ他ニ就クノ外ナキナリ。依之此地方ニテハ特ニ掲出スヘキ程ノ炭坑ヲ見ス。唯岸山村ニ在ル一坑ニ就テ其概況ヲ掲クベシ。

○岸山村炭坑

岸山村ハ同郡徳末村(唐津ヨリ伊万里ニ至ル街道ノ一駅ニシテ唐津ヨリ三里松浦川ノ一支流ニ接セリ)ノ東尙里ニ在リ。此地堅坑ヲ設ケタル一炭坑アリ。坑主ハ長崎人長見某ニテ、用所予備地内ノ借区坑トス。其坪數六万ナル由。三面小丘ニ圍繞セラレタル一溪側ノ田圃ヲ埋メ、堅坑ヲ設ク。然モ本年一月以來器械ノ破損資金ノ欠乏トニヨリ廢業セルヲ以テ、水ハ堅坑并ニ斜坑ニ充滿シ、事務所ニモ一ノ役員ヲ見ス。依テ村民ヲ呼ビ概略ヲ問フニ、堅坑ノ深サハ「百二十尺ニテ、炭層三アリ。第一ハ坑口ヨリ八十五尺ノ点ニ在テ、厚サ三尺ナレトモ中石一尺アリテ、上一尺宛ノ炭層ナリ。第二ハ「百十尺ノ点ニアリ。厚サ一尺、之ヲ尙枚モノト唱フ。第三、即チ此坑主眼ノ炭層ハ厚サ五尺、上中下ニ惡石アリテ正味三尺ノ炭アリト。堅坑ハ此炭層ニ止ル。其層ノ傾斜ハ凡八度、殆ソド南ノ方向ヲトレリ。坑内ノ本道ハ高サ四尺巾六尺ニシテ、東ノ方ヘ七百八十尺余進ミ、下シハ凡百八十尺、以テ切羽ヲ設ク。但シ採炭ハ第一第三ノ両層ニ於テス。昨年中出炭ノ最モ盛ナリシ頃ハ、日々両層ニテ平均拾五万斤ナリシト云フ。○坑夫ハ村民ニテ、其重立タルモノ坑主ニ對シ下稼人トナリ、採出炭ハ塊粉ニ区分シ、土場渡シ塊尙万斤ニ付拾三円粉同三円ヲ受取り、別ニ本道六尺ノ掘進ミ賃二円五十錢

下^キ同三円五拾錢宛ハ坑主ヨリ給与スルモノトセリ。然モ器械費トシテ一ヶ月三百五十円宛ヲ、下稼人ヨリ坑主へ仕払ヒタリト。其坑口ヨリ土場迄ノ距離拾町ノ間ハ、厚サ壹寸五分長サ五尺ノ松板二枚乃至三枚ヲ敷設シテ車道トナシ、深サ拾七吋巾十九吋半長サ二呎六吋ニシテ直径三呎五吋厚サ四吋許ナル木車輪ヲ付シ、之ニ長サ十二呎余ナル二本ノ腕木ヲ貫キ、其末端ニハ撞木形ニ長サ七吋余ナル木片ヲ付着シタル炭車ヲ以テ運搬ヲナセリ。此一車ノ容量ハ五百斤アリト云フ。○昨年中使役ノ坑夫ハ四百三十乃至五十名許（恐ラク運搬夫ヲモ込タル数ナラン）之ヲ昼夜ノ二番方ニ分チ、壹人一方平均百斤（其實百三十五斤入）入眷七個ヲ採出セリト。蓋シ此三割五分ノ增量ハ、坑夫ヨリ下稼人ニ渡スノ容赦ニシテ、又下稼人ノ土場ニ於テ坑主へ渡スニハ二割五分ノ容赦ヲ見込ヲ例トス。其土場ハ松浦川ノ一小支流ニ設ク。此所ヨリ満島迄ノ水運ハ壹万斤金一円乃至壹円拾錢、外ニ満島ニテノ揚ケ賃三十錢ヲ要セシト。是皆昨年中ノ賃額ナリト云フ。

坑外ニハ「八馬力ノ捲揚器械ヲ設ク。櫓ノ高サハ三十余尺ナリ。坑内ニハ二台ノ「スペシアル唧筒ヲ備付タリト云フ。○村民又云ク。此坑ノ第三五尺層ハ炭質最モ良好ニシテ唐津地方ノ第一等炭ナリ、未タ他坑ニ於テ之ヲ掘採スルモノアルナシト。試ニ坑外ニ散在セル炭塊ヲ取テ一閱セシニ、其言敢テ誣ザルモノ、如シ。但シ居民ノ片言ニヨリ此坑果而永遠ニ利益アルベキヤ否ヲ推測センコトハ、元ヨリ能ハザル所ナレトモ、資金欠耗ノ為メ事業ノ中絶ニ至リシハ真ニ借ムベキモノアリ。若シ有力者アリテ計画宜キヲ得ハ、恐ラク不利ノ坑ニハアラザルヘシ。

○

此地方ノ形状ニ就テ痛惜ニ耐ザルモノハ、目前ノ利ニ波々トシテ遂ニ永遠ノ富源ヲ失セン如キモノアル是ナリ。然レトモ果而岸山村民ノ唱ル如ク、同坑第三ノ五尺層ハ未タ他坑ニ

於テハ掘採セザルモノナランニハ、後年ニ望ナシトセンヤ。然モ是將タ薄資ヲ以テ暗中模索ニ類スル坑業ヲ起サハ、決テ富源ヲ開クコト能ハザラン。第一詳細ナル地質測量ヲ起シ、大体ノ地質ヲ講明セル後、永遠ノ計画ヲ為シ、以テ其業ヲ開カハ、將ニ滅セントスルノ灯火ヲシテ更ニ一層ノ光明ヲ加ルガ如キ盛業ヲ占ムルノ期ナシトセス。若シ然ラス、目今ノ儘ニノミ安ンセハ、久シカラスシテ世上唐津炭ノ痕ヲ絶ツニ至ルベシ。地方殖産ニ志アルモノ、豈之ヲ忽ニシテ可ナランヤ。

多久炭坑

多久ト稱スル村落ハ、肥前国小城郡ニ在リテ、其炭坑アルノ地ハ久原村小待村等ニ属シ、彼ト相懸隔セリ。然モ此地方ノ所産ハ之ヲ多久石炭ト稱スルガ故ニ、此名ヲ下サマルヲ得ス。○此地方ハ東松浦郡ト一統ノ煤田ナルハ、復疑ヲ容レザルベシ。唯同郡^{キウフ}敵木村ト此小待村トノ間ニハ一ノ峠アリテ、以テ郡界ヲナシ、山脈以東ノ炭ハ運路ヲ東ニ取リテ多久川ヲ下リ、佳江灣ニ出ルガ故ニ、唐津炭トハ腹背相反セリ。

多久地方ニハ別ニ著明ノ炭坑アルヲ聞カス。且ツ途次ノ便宜ヲ失シ、親シク各所ヲ巡視スルコトヲ得ス。僅ニ小待村ナル鼠喰山ノ一炭坑ヲ訪タレトモ、此モ亦小坑ニシテサセル要件ヲ見ス。其炭層ハ、一枚モノ厚サ六寸、三枚モノ厚サ壹尺八寸（壹枚ト三枚ノ間二十尺）、借区三千六百坪、日々ノ採出炭量二万五千乃至三万斤ニ過スト云ヘリ。○此地ハ山間ニ僻在シ、運搬ノ便最モ困難ナリトス。近来道ヲ敵木村ニ取り、彼岸山村ニ於ケルガ如キ炭車或ハ馬ヲ以テ数里ノ山路ヲ経、松浦川ニ達シ、満島ニ輸送ス。其運搬費ノミニテモ、壹万斤凡七円乃至八円ヲ費セリト云フ。又「ガラ」ト唱ルモノヲ製出ス。即チ粗製枯煤ナリ。其製法ハ地上ニ少シク窪ミヲ起シ、此内ニ煤炭ヲ盛りテ焚燃セシメ、炎々ノ消スルニ随ヒ粉炭ヲ被覆シ、適度ヲ計リ水ヲ灌クナリ。此ガラ」ハ、之ヲ俵ニ入レ、馬ニ載セ、

村駅市街ニ鬻キ、以テ日用ニ供セリ。

多久地方中ニテ坑業稍盛ナルハ峰ノ巢、榎木原ナリト云フ。然モ其一ヶ月ノ採出額ハ各百万斤許ナル由(鼠喰山ト甚キ差ナカラシ)。多久全地方ノ所産高ヲ統ルモ、現今平均一ヶ月四百万斤ニ過スト云ヘリ。

此地方ノ炭ヲ三層トス。地ニ由リ厚サヲ異ニス。即チ壹枚モノ八寸乃至壹尺八寸、二枚モノ六寸乃至七寸、三枚モノ壹尺八寸乃至三尺。其間三枚モノヲ最上等トスト云フ。○坑主ノ坑夫ヨリ買上直段ハ、切羽ノ遠近ニヨリ三枚モノニテ壹万斤三円ヨリ四円トス。而シテ倔強ノ坑夫ニテモ前後山兩人ニテ一日採出

ノ額壹千斤内外ナリト云。

多久炭ハ佳江ニ於テ、之ヲ一三二四ノ四等ニ区分ス。壹万斤ニ付壹等凡壹円落チノ価格ニシテ、平均二等ヲ精撰炭ト称ス。目今ノ相場ハ壹万斤拾五円ナリト云フ。長崎ニ於ケル三井物産会社ノ支店ハ、此地方ノ炭ヲ引受販売スル由。長崎港ニテノ相場ハ壹万斤貳十円ナリト聞ケリ。

多久村ニ接シタル杵島郡福母村ニモ炭坑アリシ由ナルガ、現今ハ廃業セシト云。

以上多久地方ノ概況トス。然レトモ鼠喰山ヲ除クノ外ハ親ク巡視セザルヲ以テ、其詳細ヲ知ルニ由ナシ。
(以下次号)